

2025 年 4 月 6 日

主日礼拝

《礼拝》

礼拝讃美歌⇒338 番（旧 78 番）（KH 姉）

『尊き血をもて』

聖書⇒イザヤ書 53 章 3~6、12c 編（MM 姉）

『彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／

多くの痛みを負い、病を知っている。

彼はわたしたちに顔を隠し／

わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

彼が担ったのはわたしたちの病／

彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／

わたしたちは思っていた／

神の手にかかり、打たれたから／

彼は苦しんでいるのだ、と。

彼が刺し貫かれたのは／

わたしたちの背きのためであり／

彼が打ち砕かれたのは／

わたしたちの咎のためであった。

彼の受けた懲らしめによって／

わたしたちに平和が与えられ／

彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

わたしたちは羊の群れ／

道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。

そのわたしたちの罪をすべて／

主は彼に負わせられた。

多くの人の過ちを担い／

背いた者のために執り成しをしたのは／

この人であった。』

讃美歌⇒355 番（旧 304 番）

『主はいのちを』

聖書⇒ルカによる福音書 8 章 46~48 節（ES 姉）

『しかし、イエスは、「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」』

聖書⇒ヨハネによる福音書 8 章 10~11 節

『イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」』

（祈）

讃美歌⇒365 番（旧 242 番）（KH 兄）

『ただ主を讃えて』

《パン裂き》

聖書⇒ヨハネによる福音書 6 章 53~58 節（KH 兄）

『イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」』

（式）

礼拝讃美歌⇒146 番（旧 61 番）

『小羊の血にて』

《建徳》

聖書⇒コリントの信徒への手紙一 10 章 13 節 (TM 兄)

『あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。』

聖書⇒ヨブ記 35 章 14 節

『あなたは神を見ることができないと言うが／あなたの訴えは御前にある。あなたは神を待つべきなのだ。』

聖書⇒創世記 29 章 17~35 節 (KH 兄)

『レアは優しい目をしていたが、ラケルは顔も美しく、容姿も優れていた。ヤコブはラケルを愛していたので、「下の娘のラケルをくださるなら、わたしは七年間あなたの所で働きます」と言った。ラバンは答えた。「あの娘をほかの人に嫁がせるより、お前に嫁がせる方が良い。わたしの所にいなさい。」ヤコブはラケルのために七年間働いたが、彼女を愛していたので、それはほんの数日のように思われた。ヤコブはラバンに言った。「約束の年月が満ちましたから、わたしのいいなずけと一緒にいらしてください。」ラバンは土地の人たちを皆集め祝宴を開き、夜になると、娘のレアをヤコブのもとに連れて行ったので、ヤコブは彼女のところに入った。ラバンはまた、女奴隷ジルパを娘レアに召し使いとして付けてやった。ところが、朝になってみると、それはレアであった。ヤコブがラバンに、「どうしてこんなことをなさったのですか。わたしがあなたのもとで働いたのは、ラケルのためではありませんか。なぜ、わたしをだましたのですか」と言うと、ラバンは答えた。「我々の所では、妹を姉より先に嫁がせることはしないのだ。とにかく、この一週間の婚礼の祝いを済ませなさい。そうすれば、妹の方もお前に嫁がせよう。だがもう七年間、うちで働いてもらわねばならない。」ヤコブが、言われたとおり一週間の婚礼の祝いを済ませると、ラバンは下の娘のラケルもヤコブに妻として与えた。ラバンはまた、女奴隷ビルハを娘ラケルに召し使いとして付けてやった。こうして、ヤコブはラケルをめとった。ヤコブはレアよりもラケルを愛した。そして、更にもう七年ラバンのもとで働いた。主は、レアが疎んじられているのを見て彼女の胎を開かれたが、ラケルには子供ができなかった。レアは身ごもって男の子を産み、ルベンと名付けた。それは、彼女が、「主はわたしの苦しみを顧みて（ラア）くださった。これからは夫もわたしを愛してくれるにちがいない」と言ったからである。レアはまた身ごもって男の子を産み、「主はわたしが疎んじられていることを耳にされ（シヤマ）、またこの子をも授けてくださった」と言って、シメオンと名付けた。レアはまた身ごもって男の子を産み、「これからはきっと、夫はわたしに結び付いて（ラベ）くれるだろう。夫のために三人も男の子を産んだのだから」と言った。そこで、その子をレビと名付けた。レアはまた身ごもって男の子を産み、「今度こそ主をほめたたえ（ヤダ）よう」と言った。そこで、その子をユダと名付けた。しばらく、彼女は子を産まなくなった。』

聖書⇒イザヤ書 53 章 2b~3 節

『見るべき面影はなく／
輝かしい風格も、好ましい容姿もない。
彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／
多くの痛みを負い、病を知っている。
彼はわたしたちに顔を隠し／
わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。』

聖書⇒創世記 35 章 16~20 節

『一同がベテルを出発し、エフラタまで行くにはまだかなりの道のりがあるときに、ラケルが産気づいたが、難産であった。ラケルが産みの苦しみをしているとき、助産婦は彼女に、「心配ありません。今度も男の子ですよ」と言った。ラケルが最後の息を引き取ろうとするとき、その子をベン・オニ（わたしの苦しみの子）と名付けたが、父はこれをベニヤミン（幸いの子）と呼んだ。ラケルは死んで、エフラタ、すなわち今日のベツレヘムへ向かう道の傍らに葬られた。ヤコブは、彼女の葬られた所に記念碑を立てた。それは、ラケルの葬りの碑として今でも残っている。』

聖書⇒創世記 49 章 29~32 節

『ヤコブは息子たちに命じた。「間もなくわたしは、先祖の列に加えられる。わたしをヘト人エフロンの畑にある洞穴に、先祖たちと共に葬ってほしい。それはカナン地方のmamreの前のmakpeラの畑にある洞穴で、アブラハムがヘト人エフロンから買い取り、墓地として所有するようになった。そこに、アブラハムと妻サラが葬られている。そこに、イサクと妻リベカも葬られている。そこに、わたしもレアを葬った。あの畑とあそこにある洞穴は、ヘトの人たちから買い取ったものだ。』

聖書⇒マタイによる福音書 1 章 2~3 節

『アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、**ヤコブはユダとその兄弟たちを**、ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、』

礼拝讃美歌⇒40 番（旧 50 番）（KH 兄）

『主イエスはわがため』

《建徳要旨》